

SY7-2

科学とテクノロジーを活用した児童虐待対応

高岡 昂太

株式会社 AiCAN

【背景】

虐待対応は不確実な情報が多い中で、迅速かつ的確に判断するという高度な専門性が求められる。一方で、急増する相談件数に現場は逼迫され、疲弊している。過去の事例データに基づく客観的な示唆を参照することで見過ごし防止が期待できると言われているが、実際にそれを使う9割以上の児童相談所は自らの業務データを活用した経験がなく、効果的に活用するための現場の伴走支援が必要とされている（令和2年度厚生労働省子ども子育て支援推進調査研究事業，2021）。

【解決策】

株式会社 AiCAN では、我が国の国立研究所の一つである産業技術総合研究所発スタートアップとして、児童相談所や自治体のこども家庭センター（子育て世代包括支援センター・子ども家庭総合支援拠点）、関係機関（学校や幼稚園・保育園、医療機関、警察、児童福祉機関、NPO など）を対象に、自治体向けのサブスクリプション型の児童虐待対応 SaaS（Software as a service）“AiCAN サービス”を提供している。“AiCAN サービス”は、① ICT 機能：セキュリティの確保されたタブレットアプリで外出先でも調査記録やアセスメントの入力・閲覧、チャットによる情報共有を可能にし、業務を効率化する。②データ利活用機能：入力されたデータをもとに AI によるリスク分析の結果を画面上で即時フィードバックし、意思決定の補助に参照できるようにする。③伴走支援：システム利用を業務改善につなげるための、ワーキンググループでの課題整理、職員研修による活用への動機づけ、定期的なデータ分析結果の報告による改善提案など、で構成されている。

この“AiCAN サービス”において、システム開発・提供からデータ分析、業務改善支援の伴走支援までをワンストップで提供することにより、現場の業務の中で必要な調査記録を入力でき、自然と利活用可能なデータが溜まる業務フローの社会実装を現場と共に行ってきた。ただし、社会実装は、順調に進んできたわけではなく、これまでの取り組みで、大きな成果を上げた部分もあれば、さらに今後もサービスの改善を進めていく必要がある点も存在する。

【ディスカッション】

本発表では、実装科学（Implementation Science）の視点から、どのように児童虐待対応領域において、科学とテクノロジーを実装していくかについて、①現場が解決したい課題（KPI：Key Performance Indicator）に関する合意形成、②業務で入力してもらったデータとその支援、③データの解析、④業務と AiCAN サービスの改善という4つの視点から検討を行う。その上で、児童虐待に関わる様々な近接の社会課題解決のプレイヤーと共に、社会的インパクトをいかに日本で生み出していけるかについてディスカッションを行いたい。